近代朝鮮の自国認識と小国論（一）

——金允植に見る朝鮮ナショナリズム形成の一前提——

木村　幹

序　章
第一章　金允植とその時代
第一節　生い立ち
第二節　二人の師——兪莘煥と朴珪寿
第三節　改革のコスト
第二章　領選使行
第一節　開化思想の洗礼
第二節　領選使任命
第三節　李鴻章への書簡
第三章　親清官僚の誕生
第一節　洋務官僚との接触
第二節　対米開国
第三節　壬午軍乱と允植の帰国　（以上本号）
第四章　穏健開化派の時代
第一節　清朝宗属関係の実質化
第二節　軍事改革と富国論
第三節　甲申政変と二つの開化派
第五章　挫折、そして晩年
第一節　朝清対立と允植の失脚
第二節　「儒教的レッセフェール」への回帰
第三節　朝鮮の財政と「軟性国家」
第四節　併合、そして三一運動
むすびにかえて　——認識の中の大国と小国

序　章

被告金允植は予て○○人からも○○の人からも○○と目されていたのである。其れにも拘らず今年の三月一日突如○○を煽動し配布し○○をした。然も左様した被告金允植といひ李容植は何れも○○当時激烈なる反対をなせしにも拘らず爵位及恩賜金を受しのみか中枢院の顧問となり大提学の官職を受ている。何といふ矛盾か。今日志士を気取り○○○○しても其れは世間を欺く虚名に過ぎないのである。(1)

朝鮮近代史。それが苦難の歴史であることは今更いう迄もない。就中、その植民地への過程は、日韓両国にとって、今日に至る迄、非常な重みを以て現れている。楽浪郡の消滅以降、一貫して「独立」を保ちつづけて来た朝鮮が、何故、あれほど簡単に日本の植民地へと転落したのか、それは簡単に答えることのできる問題ではなかろう。

このことを考える上で、特に興味を引くのが、朝鮮が中央政府の統一した指揮の下、正規軍を動員し、諸列強の圧力に直接立ち向かうことなく、植民地化したという事実である。これは朝鮮の植民地化の問題を考える場合には、避けては通れぬ問題であろう。勿論、その背後には、政府レベルとは異なるものとしての民衆の抵抗があったことはよく知られている。しかし、嘗て丁若鏞が民堡について述べたように、政府、若しくはその世界における政治的支配層の後援なき抵抗は、余りにも大きなハンデを負っていたと言えよう。(2)

ここで重要となって来るのが、当時の政治的支配層が列強の脅威の中で、どのように自らの国を運営して行こうと考えていたか、そして、その背景にはどのような国際情勢と自国に対する認識があったか、ということである。

筆者は一八六〇年代から七〇年代を扱った、前稿「儒教的レッセフェールと朝貢体制」[3]において、そのような朝鮮の政治的支配層の軍事的行動を阻害したものとして、朝鮮独特の小国意識があったことを指摘した。それでは、これに続く時代である、一八八〇年代の状況はどうなっていたのであろうか。また、その一八八〇年代は、続く九〇年代、そして大韓帝国最後の一〇年間へとどのような影響を与えて行ったのであろうか。

このような問題を考えるに当たって、筆者が取り上げるのが、所謂「穏健開化派」の領袖的存在、金允植（一八三五～一九二二）である。後に詳しく述べるように、彼の経歴は、初期開化派の時代から始まり、領選使としての清への派遣、親清官僚としての開化政策従事、配流、「親日官僚」としての再登場、三一運動への参加、と波乱に満ちたものであり、そこにはある意味で複雑で矛盾に満ちた朝鮮近代の姿が、その侭現れていると言えるであろう。冒頭に挙げた言葉は、三一運動後の裁判で、日本人裁判官が彼に投げかけたものであるが、以後述べて行くように、そこには一面的ではあるが、彼を考える上で無視することの出来ない事実が述べられている。何故、彼はそのような複雑な道程を歩み、そして、にも拘らず、結局は三一運動における民族主義へと到達し得たのであろうか。

今日迄彼に対する研究は、その多くの著作の存在ともあいまって、比較的多く行われて来た。[4] しかし、筆者の見るところ、その多くは依然として、彼の生涯を、「善悪」のどちらかの面を強調することにより、一面的に描き出すか、また、ある一時期についてのみ述べたものであり、一見「矛盾」に満ちた彼の生涯を、総合的に描き出したものは、多くはないように思われる。一体、何が彼を動かし、その思想を作らせたのか。

そこで、以下、筆者は、このような彼の生涯とその中に見られる「自国認識」や政治戦略を見て行くことにより、朝鮮近代、就中、朝鮮近代の政治的支配層の有していた特質と、彼らの置かれていた状況を、日本や清といった周辺諸国との国際比較の観点を含ませつつ、浮き彫りにして行こうと思う。

我々はその前に、彼という人物と彼を取り巻く環境について知らねばならないであろう。それでは、まず最初に、幼年時代の金允植とその時代的背景について、簡単に触れてみることにしよう。

（1）近藤釼一編『万歳騒擾事件（三・一運動）』二、朝鮮近代史料　朝鮮総督府関係重要文書選集一〇、巌南堂書店（一九六四）、二二頁。

（2）鄭景紘「一九世紀의 새로운 國土防衛論」、서울大學校人文大學國史學科『韓國史論』【韓国】四、三四八頁。また、丁若鏞著・國防部戰史編纂委員會編『民堡議・民堡輯説（附漁樵問答）』國防部戰史編纂委員會【韓国】（一九八九）を参照のこと。

（3）拙稿「『儒教的レッセフェール』と朝貢体制――近代朝鮮における『上からの改革』を巡る一考察」一、二・完、『法學論叢』一三一巻六号・一三三巻四号。

（4）例えば、原田環「一八八〇年代の閔氏政権と金允植」、趙景達「朝鮮における大国主義と小国主義の相克」、以上、『朝鮮史研究会論文集』第二二輯。韓国においては、崔震植「韓國近代의穏健開化派研究」、博士学位論文（嶺南大學）【韓国】、等を参照のこと。

第一章　金允植とその時代

第一節　生い立ち

近代以前、そして現在に至る迄、韓国・朝鮮の個々人を考える上で、看過することの出来ないものとして、本貫がある。まずその点から見て行くことにしよう。

金允植は、字を洵卿、号を雲養といい、本貫は清風である。即ち、清風金氏の出ということになる。清風金氏と

は、高麗時代の相門侍郎であった金大猷を始祖とする一族である。[1] この本貫出身の代表的人物としては、朝鮮王朝中期、仁祖・孝宗両朝で活躍し、領議政迄勤めた、文貞公金堉がいる。金堉は今日朝鮮近代の萌芽とされる、実学の初期の論者の一人であり、また、二度の胡乱の後、清に対する報復攻撃、即ち「北伐」を主張した時の国王孝宗に対して、強くその非を指摘したとして知られる人物である。孝宗の路線を、清に対して対等な立場を主張し、その手段として「武力」を用いようとした「武断派」とするのなら、彼の立場は、典型的な「文治派」のそれであると言えよう。[2]

さて、このような人物をも輩出した清風金氏であるが、その勢力は決して、他の両班のそれと比べ優位したものではなかった。特に金堉以後の没落ぶりは顕著であり、台頭してきた、安東金氏・豊壌趙氏等の、勢道勢力に押され、大きくその勢力を縮小させていた。

允植は、一八三五年、一族がこのような状況にある中、京畿道は広州で生を受けた。尤も彼は、金堉の血はひいてはおらず、金堉の叔父・興禄の末であり、しかもその中でも、傍流に属する者であった。実際、彼の直系の家系は祖父用善、父益泰共に、族譜に官職の記載を見ることが出来ず、辛うじて、曾祖父・基建になって「参奉」というさほど高いとは言えない官職を見出すことができるのみである。仮に巷間言われる「両班とは三代以内の直系親族に科挙合格者を出した家である」という基準を採用するなら、允植の家系は、どうにか辛うじてこれに該当するかしないかの程度のものであったに過ぎない。

実際、彼の幼年時代の生活は相当に逼迫したものであったようである。[3] このような状況では、彼が十分に教育を受け、両班官僚として大成することは難しかったであろう。しかも、更に不幸なことに、この父母さえも、彼が八歳の時にこの世を去っている。

ここにおいて彼にとり不幸中の幸いであったのは、叔父、清恩君益鼎の存在である。益鼎は、元々允植の祖父用善の男子として生まれたが、その後これを離れ、金堉の流れを引く清風金氏宗家の跡を次いだ人物である。当時、清風金氏宗家も、允植等の流れに劣らず没落の憂き目を見ていたが、それでも、彼は宗家の特権であろうか、蔭職にて官職への扉を開き、顕隆園参奉や西原県監を経、最終的に戸曹参判に迄登り詰めている。(4)

父母と死別した後、允植はこの益鼎に引き取られ、少年時代を益鼎の本邸のあった、京畿道楊根の帰川で過ごすこととなる。当時の益鼎の地位は、さほど高いとは言えなかったが、それでも清風金氏の中においては、最高のものであった。つまり、允植は一族の中で最も恵まれた環境に入ったのである。ここで初めて彼は、それなりの教育を受けられることができるようになった。益鼎には、後に五名の内、三名迄が科挙に合格するという、優秀な子供達がいた。以後、允植は、この従兄弟達と共に、そして彼らと競う形で、家塾で学習し、大きくその知識を増すこととなるのである。

この家塾の講師が、小山金尚弼であった。後の允植の回想によれば、小山は彼を「汝孤露人也、須力学自奮勉、思樹立之道、豈可與他児循例同程以為自足乎」と諭したという。(5) 比較的恵まれた環境にありながらも、安んじることのできなかったであろう居候の境遇の中、「学問を基礎にして立身するのだ」という彼の姿勢はこの時代に作られた、と言っても過言ではなかろう。この言葉は五、六〇年後になっても彼の耳を離れなかったという。

尤も、このような精神的な面を離れ、学問的・思想的影響という点を主として考えるなら、彼により大きな影響を与えたのは、允植が一四の時、死別する迄仕えた小山よりも、一六歳になり漢城（今日のソウル）に出た後仕えた二人の師であろう。それでは、彼は漢城でどのような教育を受けたのであろうか。次にこの点について見てみることにしよう。

(1) 清風金氏と允植の生い立ちについては、崔震植「韓國近代」、及び、萬姓大同譜發行所編『萬姓大同譜』上、萬姓大同譜發行所【韓国】(一九八三)、三九一―七頁。

(2) 金堉については差し当たり、崔震植「韓國近代」一三頁、及び、車文燮『朝鮮時代軍政研究』檀國大學出版部【韓国】(一九七三)、二五四頁以下を参照のこと。

(3) 金允植『続陰晴史』上、國史編纂委員會【韓国】(一九六〇)、三三頁。

(4) 崔震植「韓國近代」、一三―四頁。

(5) 韓國學文献研究所編『金允植全集』上、韓國近代思想叢書、亞細亞文化社【韓国】(一九八〇)、四六〇頁。尚、同書は以下、『全集』と略述する。

第二節　二人の師――兪莘煥と朴珪寿

金允植は一六になって漢城へ出ることとなる。それは疑いもなく、そこで最新の学問を修めて研鑽を積み、また、幾多の有力両班の知己を得ることにより、少しでも科挙合格と官職獲得に接近しようとするものであったろう。そのような允植が漢城に出て最初に仕えたのが、当時の朝鮮儒学界に、一大勢力を誇っていた、鳳棲兪莘煥である。入門には、兪莘煥の下で学んでいた、従兄金晩植（益鼎の子）の紹介があったものと思われる。兪莘煥は、宋時烈の流れを汲む性理学・礼学・文学等の大家であり、允植の上京当時における彼の勢力は、任憲晦の鼓山学派、李恒老の華西学派、と並ぶ、三大学派を形成するにまで至っていた。

ここで兪莘煥が允植に与えた影響を考えてみるなら、二つの点を挙げることが出来よう。まず第一は、莘煥が強い実学への志向を有していたことである。即ち、莘煥は、例えば、李恒老などと異なり、現実を現実として見つめ

る視点を有していた。特に内政改革（特に土地再分配論）や対清認識について、後の允植の思想・行動に与えた影響は大きい。[1]

第二に、兪莘煥の同門達との交流である。両班として、特に恵まれた環境にある、とは言えなかった允植にとって、この大家の下に出入りする、有力両班の子弟との交流は、後の彼の官界進出に大きな助けとなったものと考えられる。兪莘煥の下で学んでいた主な人物には、允植の従兄晩植を始めとして、徐応淳・金洛鉉・尹秉鼎・尹致聃・沈琦澤・韓章錫・閔台鎬・閔奎鎬・李応辰・南廷哲・呉俊泳等があったという。[2] 何れも後の近代朝鮮史において重要な役割を果たした人物である。また、この中に、後に高宗の正妻、閔妃の戚族として台頭する、驪興閔氏の有力者が含まれていることも無視出来ない。

ここに允植は、現実への関心、と、この関心を実践に結び付ける為の人脈、とを獲得することとなる。しかし、それだけでは、彼の直接的な政界進出へとは繋がらなかった。その様な中、一八五九年、兪莘煥は弟子允植の出世を見ることなく他界することとなる。官界に未だ足場を持たず、思想的にも未熟な允植には、新たなる師が必要であった。

允植が次に教えを乞うたのが、朴珪寿である。朴珪寿は、北学の巨匠、朴趾源の嫡孫として生まれ、その家学としての教えを、当時の社会情勢に合う形で、開化思想へと展開した人物として、言い替えるなら、近代朝鮮において実学と開化思想の結節点の役割を果たした人物として、高く評価されている人物である。彼は教育者としても有能であり、その門下からは、允植を始め、金玉均や朴泳孝等、後の開化論者の多くが輩出している。

朴珪寿については、原田環の研究をはじめ、多くの蓄積があり、筆者も前稿において少し触れたことがある。[3] この朴珪寿に允植が仕えるようになった理由としては、允植の叔母の一人が朴趾源の娘であったことは勿論であるが、

加えて、兪莘煥の下で彼が身につけた、強い実学への志向があったであろう。そのような允植が朴珪寿に仕えた時代、それは朴珪寿にとっても、思想的にも政治的にも最も充実していた時期であった。允植が莘煥と死別した翌年、清ではアロー号戦争が勃発しているが、珪寿はこれに際して、戦争後の清の情勢を探る役割をも帯びて、燕行副使として渡清し、最新の国際情勢の知識を身につけていた。また、内政面においても、彼の活躍は目覚ましく、その一年後、朝鮮半島南部で勃発した民乱の情報把握と慰撫を目的とした、晋州按覈使として派遣され、実地に当時の朝鮮社会が抱えていた問題を、観察し、それへの提言を行っている。

激変する時代は、朴珪寿のような「実」学的能力を持っていた人物を希求していた。このような朴珪寿の活躍は、所謂大院君政権期に入って一層活発化することとなる。アメリカの武装商船シャーマン号との紛争処理、高宗のアメリカへの返信代筆等、この時代の外交的業務の相当部分が、その職責とは、必ずしも無関係に彼によって担われたのである。このような彼が「儒教的レッセフェール」とでもいうべき、独特の開国論を有していたことは、前稿において述べた通りである。そして、やがて、その点において大院君と対立した彼は、その追放の一翼を担うこととなる。そして、彼は、大院君政権の崩壊後、右議政に迄登り詰め、朝鮮の対日開国に大きな役割を果たすこととなるのである。

当然の如く、允植は、そのような朴珪寿のこうした外界への姿勢から大きな影響を受けている。特にその政治的態度にはこのような影響と思われる点が多分に存在する。それと同時に、朴珪寿門下時代の彼を考える上で看過することができないのが、門下生との交流である。彼等は朴珪寿亡き後、開化派の指導的人物として様々な形で活躍することとなる。彼等との人的結合は、後に允植の政治的行動にも大きな影響を与えることとなる。尤も、金玉均等、珪寿の弟子の多くは、やがて急進開化派となり、時の閔氏勢道政権と対決・打倒する立場を選択することとな

る。しかし、允植は政権の中に踏みとどまり「制度内的改革」に努める道を選択した。一体、何が允植と他を分けるに至らしめたのであろうか。そもそも彼らが、生きた時代はどのような時代であったのであろうか。次に彼らが活躍することとなる、時代的背景について触れてみることにしたいと思う。

（1）　兪莘煥と門下については、崔震植「韓國近代」、一四―六頁、李相一『雲養金允植의改良主義的改革論研究』、碩士学位論文（東國大學校大學院）【韓国】五―七頁等、参照。

（2）　李相一「雲養金允植」、五頁。

（3）　拙稿「儒教的」、及び、原田環の一連の著作、李完宰『初期開化思想研究』、民族文化社【韓国】（一九八九）等を参照のこと。

第三節　改革のコスト[1]

允植が科挙に合格したのは高宗一年（一八七四年）のことである。[2]奇しくもこの年は、一〇年間続いた大院君政権が倒れ、新たな癸酉政権が本格的に出発した年であった。[3]

当時の朝鮮王朝は大きな危機に直面していた。十九世紀に入ると、西洋列強は、日本や清の開国以後も、アジアにおいて最後迄鎖国体制を維持しようとしていた朝鮮王朝に対して、圧力を加え、これを外界に開かせようとしていた。[4]一方目を内に向ければ、一六・七世紀の日本と清による軍事的侵攻以来、崩壊の度を加えつつあった、朝鮮王朝の国家秩序は、この頃、紊乱の極に達し、各地で様々な「民乱」が勃発するに至っていた。

大院君政権は、このような時代状況の下、王朝支配の立て直しを目標として誕生した、一種の挙国一致政権であった。そこでの主な政策は、次のようにまとめることができる。即ち、その第一は、西洋、そして後に加わった日

本の開国圧力に対しては、徹頭徹尾これを拒み、従来の鎖国体制を維持せんとすること。その為の手段として、外交的手段と平行して、積極的な軍備拡張が行われた。この時代、大院君政権は、主なものだけでも、フランスとアメリカによる、一回ずつの軍事的侵攻を受け、これを軍事的手段により排除することに成功している。注目されるのは、そこにおける軍事的成果もさることながら、当時の体制の現体制維持にかける、強い意志であろう。朝鮮王朝は、軍事的には、西洋と互角に戦うことは出来なかったが、強力な交戦意志を表示することにより、所詮は小規模であった西洋列強の軍事的侵攻を、断念させるに至ったのである。

政権は、このような政策を維持する為にも、強力な体制を欲していた。そこで大院君政権は、王朝の権威的・実態的立て直しの為、様々な手段に訴えることとなる。景福宮の再建や王家である全州李氏の地位を向上させる諸政策は、そのような王朝の権威を再確認する為の作業であり、また、三軍府の再設置や備辺司から議政府への権力移行等の制度の復古的再整備は、王朝の制度的な再建努力の現れであろう。これが第二の点である。

第三の特徴は、左記の改革を実施するに当たって、そのコストの負担を、在京の威族によりも、在地のそれに対し強く臨んだことであろう。大院君政権の目指す王朝支配体制の立て直しは、軍備増強の為といい、王宮重建の為といい、必然的に、多くのコストを必要とした。当然、そこに、誰がそのコストを負担するか、という問題が生じることとなる。この解決策として、大院君政権は、漢城に蔓る威族の勢力よりも、在地の有力者にこれを転嫁することを選択したのである。

それが実践し得たか否かは問題ではない。問題は彼等が何を目指したかであろう。しかし、そのような大院君政権の目論見は、在地勢力と在京の反大院君勢力という、二つの勢力の連合により、敢え無く挫折することとなる。代わって出来たのが、朴珪寿に代表される「儒教的レッセフェール」の思想であり、一種の「楽観的小国論」とで

もいうべきものであった。例えば、朴珪寿は、高宗五年、アメリカについて次のように述べている。「今日、アメリカは地球上で最も公平な国であるという。その政治は巧みに問題を解決し、しかも世界の最富裕国であり、むやみやたらに他国を侵略しようという欲はない。仮令、アメリカが自ら我々と盟約を結ぶことを提案してこないとしても、我が国が率先してこれと固く盟約を結び、孤立を回避することがどうしていけないのだろうか」[5]。新政権はこのような中、列強との対決を中断し、融和へと大きく方向転換することとなるのである。

高宗一一年、朝鮮王朝は正にそのような方向転換しの真っ只中であった。金允植の官界への本格的参入は、このような朴珪寿の政治的運命が頂点に達した時であった。允植が俄に科挙に合格した背景にも或いは、そのような権力の動きがあったのかも知れぬ。

それではこのような中、允植はどのように考え、行動したのであろうか。次に章を改めて、允植の行動と思想形成過程を、彼の政治的経歴と絡めつつ見て行くことにしよう。

(1) 本節の内容については、詳しくは、拙稿「儒教的」一、を参照のこと。

(2) 片泓基『韓國科擧史』、明義会【韓国】(一九八七)二〇〇頁。また以下、史料の関係上、断りのない限り、旧歴で表示を行う。大凡、高宗元年＝一八六四年である。

(3) 「癸酉政権」という語を用いる理由については、拙稿「儒教的」一、三七頁。

(4) 本稿では便宜上、西洋的秩序に編入される以前の段階の東アジア諸国の国際体制の中における在り方を表す語として、「鎖国」を用いる。この語の可否については、例えば、荒野泰典『近世日本と東アジア』、東京大学出版会(一九八八)、序章を参照のこと。また、拙稿「『徳治』の論理と『法治』の論理」、『愛媛法学会雑誌』第二十巻第三・四合併号。

(5) 拙稿「儒教的」二・完、二三頁。

第二章　領選使行

大院君政権が倒れたのは、彼等が強力な国家を志向し、そのコストを在地支配層に転嫁しようとしたが為であった。その方向性の是非はともかく、危機を前にして、何等かの新しい姿勢を打ち出すことは、為政者としてある意味で、避けることの出来ぬことであったろう。

危機の時代にどのように対応するか。そして、その為のコストをどう稔出するか。この問題は、後発国が近代という時代と遭遇するに当たって、まず以て解決しなければならない難問である。各国はこの難問を前に、苦悩し、また現在も苦悩しつづけている。

それは允植においても決して例外ではない。それでは、允植はこのような状況に際して、改革のコストの問題をいかにして解決しようとしたのであろうか。以下、この点を軸にして、允植の思想的遍歴を追ってみることとしよう。

第一節　開化思想の洗礼

さて、官僚としての允植の思想を見るに先立って注目すべきが、彼が官界に進出する以前、どのような考えを有していたかであろう。この点については、彼が、科挙に合格する五年程前、丙寅洋擾と呼ばれるフランス軍の江華島侵攻の頃、西洋列強の脅威に対して書いた「洋擾時答某人書」が残されている。(1) それを見てみれば、次のようである。

彼は当時の洋擾を憂いて言う。西洋の脅威はそれ自身が脅威であるのではない。問題は、それを前にして、朝鮮が「斎居無聊」していることである。問題は四つである。即ち、その第一は今の州や県が無用の丁を徴発していることである。この侭では、村落は住む人を失い荒廃する他ない。このような状況では西洋列強に立ち向かうことなど不可能である。第二は、折角そのようにして集めた兵丁が全くの弱兵であり、それを支える補給も未整備であることである。第三点は、そもそもそのような兵力を支える徴税能力の不足である。王朝は既に民信を失っており、兵丁の食糧を集めることさえ困難な状況である。第四は、近年水運が機能を失い、兵站を専ら陸運に頼っていることである。このような下では、万一徴税が正常に行われてもこれを兵丁に対して適切に配分することは不可能であろう。

結局、彼のいうには、根本的な問題は、洋擾という外部からの問題にあるのではなく、王朝の秩序が混乱していることである。尤も、このような立場は当時の朝鮮王朝においては珍しいものではなかった。[2] 当時の王朝の正統教義であった、儒教の思想的内容を考えれば、このような問題の立て方は、ある意味では当然であったというべきであろう。

同時に、そこにはある程度当時の実状も反映されていた。既に述べたように、大院君政権は、このような状況を改善する為に存在していたのである。彼等はここから積極的に軍備拡張へと乗り出した。しかし、ここからが、允植の主張は、大院君政権とは異なる。

彼は陸上の戦闘においては多くの兵力が必要であることを、確認した上で、次のように主張する。「然竊謂禦洋之道、貴在兵少而精、器便而利、何者、少則食減、精則不乱、便則益運、利則能中、洋夷之所以能従四海者、用此道也」。つまり、洋夷との戦いにおいては、兵力の多寡よりも質が重要である。少数の精鋭を育て、優れた兵器を持た

せることこそが、海からの脅威である洋擾に対するには必要なのである。しかも、これには利点がある。即ち、兵力が少なければ、その為の食糧も少なくて済む。精鋭であれば、軍の乱れも少なく、統率も楽であろう。運ぶ為の食糧が少なければ、運送にも苦労する必要がない。兵器が優れていれば、命中率も高いであろう。

実際、西洋列強の強さはそうして獲得されたものであった。今日から考えて、そこに一面の真実があることも事実であろう。それではその対策は、どうすれば良いのか。

主たる手段は二つである。[3] まずその一は、国中から良工と才能ある人を集め、大砲や水雷砲を造ることであり、第二に、地方から無用の兵丁を徴発することを一切止め、漢城に駐屯する精鋭部隊から兵を選りすぐり、沿海の要害に配置することである。

注目すべき点の第一は、この允植の「策」においては、朝鮮社会に新たなるコストを負担させる必要は、全く生じないことである。否、允植によれば、現在の多くの弱兵を抱えるシステムより、少数の精鋭を育成しこれに依存する方が、遙かに安上がりでさえあるのである。朝鮮が列強に勝利する為には、これとの持久戦に持ち込み、相手の食糧が尽きるのを待つのが最善である。多数弱兵主義では、兵糧等の点を考えれば、不安定な朝鮮社会がそれ迄の間、兵を支えつづけることは困難であろう。少数精鋭主義を実践することにより、初めて、彼等と五分に、長期戦を遂行することが可能となるのである。

第二は、左記のような方法で、軍事改革に成功した朝鮮が、列強の脅威にまがりなりにも独力で対抗することが意図されていることである。また、このような軍事的改革に当たって、特に他の「大国」の助力が必要とされている形跡も見られない。このような允植の考え方は、後に述べるように、同じ時期の師、朴珪寿が、朝鮮の自主を維持する為に、独力での防衛と同時に「正義の大国」[4]の支援をも必要であると考えていたことと比べても、より主体

的なものであったと言えよう。尤も、それを以って彼がそのような「正義の大国」の存在やそれへの依存の必要を、完全に否定していたということにはならないが。

兵站の負担は少なくなり、しかも軍事的な強化が実現される。それは、現実化されるなら、正に理想的な解決策であったろう。では、允植はこの考えをどのようにして持つに至ったのであろうか。

この点については、允植が自身述べているように[5]、阿片戦争当時の清知識人魏源の影響が大である。周知のように、魏源は、阿片戦争において、西洋列強の強大さを認識した清の一部知識人達、即ち初期洋務論者の一人である。彼の主著『海國圖志』は、当時の朝鮮に伝わった、洋務論に関する貴重な著作の一つであり[6]、当時の朝鮮開化派のバイブル的位置を占める著作であった。「夷の長技を以て夷を制する」という魏源の考え方の一部は、大院君政権下において、申櫶による水雷砲の試作という形で実を結んでいる。

金允植の主張した少数精鋭主義も、そのような魏源の主張の一つを受けたものであった。魏源の頭には、圧倒的な数的不利にも拘らず、数隻の軍艦で数十隻のジャンク船を粉砕した英国艦隊の姿があったのかも知れない。

允植の師、朴珪寿もこのような魏源の影響を大きく受けていた。魏源の少数精鋭主義は、軍備を極力排斥せんとする朴珪寿の思想とも合致していたことであろう。或いは允植も、そのような朴珪寿の下で、魏源の教えを学んだのかも知れない[7]。

つまり、この時点での允植の主張、それは清の初期洋務思想から朝鮮の初期開化思想へと流れる思想的系譜をその侭引き継いだものであった。それは当時としては斬新なものであったかも知れないが、そこにはまだ允植独自の主張は特に見られるに至っていない。

ともあれ、これが任官前の允植の思想的状況であった。今日の我々から見れば、それは余りにも楽観的なものと

見えよう。それでは、官界進出後、彼の思想はどのように変化して行ったのであろうか。次に彼が開化官僚として、その頭角を顕す最大の契機となった、領選使行における允植の動向に目を向けてみることにしよう。

(1) 『全集』下、二八八—九一頁。
(2) 例えば、同時期に申櫶も同様の上疏文を書いている。韓國學文獻研究所編『申櫶全集』上、韓國近代思想叢書、亞細亞文化社【韓国】(一九八〇)、二九、三五頁。
(3) この他にキリスト教信仰の広まりを諫めている。
(4) 拙稿「儒教的」二・完、二二—五頁。
(5) 『全集』下、二八九頁。
(6) 例えば、李光麟『韓國開化史研究』、一潮閣【韓国】(一九六九)、二—三〇頁。
(7) 朴珪寿や金允植と『海國圖示』の関係については、姜在彦『朝鮮の開化思想』、岩波書店(一九八〇)、七六、一一一頁、等。

第二節　領選使任命

既に述べたように、金允植が科挙に合格したのは、高宗一一年のことであった。時に、彼は既に四〇歳になっていた。決して早いとは言えない官界への本格的進出であったが、その後、允植は順調な出世を続け、朴珪寿の、政治の第一線からの隠退と、死亡の後も、そのことは変わることはなかった。(1)

その後彼は、兵曹正郎・黄海道暗行御使等を経て、高宗一六年には刑曹参議に迄到達する。僅か五年で正三品の地位に迄登り詰めたことになる。驪興閔氏や安東金氏といった威族出身の者ならいざ知らず、父も祖父も官界にその名さえ留めることのできなかった者としては、これは異例の出世であったと言えよう。

この背景には、兪莘煥門下時代の、驪興閔氏の人物との人脈もあったろう。兪莘煥門下時代には允植と同じ様な境遇にあった彼等は、今や、高宗の正妻であり、背後で権勢を誇る閔妃の親族として、大きな力を揮うに至っていた。官界への進出に当たって、嘗て培われた彼等との人間的紐帯が、有用であったろうことは想像に難くない。

だが、同時に忘れてはならないのが、允植の開化派としての知識と、官僚としての手腕である。その点を何よりも如実に示しているのが、彼の領選使への任命であろう。領選使とは、西洋列強や日本との接触により、彼等の強大さとその脅威を実感した朝鮮王朝が、西洋の長技、即ち軍事技術を学ぶ為に清は天津へと遣わした使節の総責任者の呼称である。学徒は全部で六九名、それは、日本からの軍事教官を招いた朝鮮初の西洋式軍隊であった別技軍の創設と並ぶ、当時の朝鮮の軍事的近代化の二つの柱の一つであった。

尤も、この領選使には、既に高宗一八年二月二六日、趙龍鎬が任命されていた。允植にその職が回って来たのは、その突然の死去によるものである。(2) 当時、允植は、趙龍鎬とほぼ同じ官位にあり、官職の面においてもほぼ同等の順天府使を努めていた。彼にこれが任命されるに至った経緯は必ずしも明らかではないが、その決定に当たっては、允植が朴珪寿の下で研鑽を積んでいたこと、そして黄海道暗行御使の際の活躍に見られたような、適切な状況把握能力を有していたこと等が考慮されたのであろう。同じ朴珪寿門下の中でも、允植は年齢的にも、経験の上でも他を一歩も二歩もリードしていた。そのような彼がこの重責に任じられたことは、ある意味で当然であったのかも知れない。

師朴珪寿の思想は、北学の流れを汲むものである。北学とは元来、朝鮮から見れば夷狄であった、満州族の王朝である清朝からも、器レベルにおいて学ぶべきことがあれば、積極的に学ぶべきである、とする思想であった。夷狄の国である清で、夷狄の術である西洋の技術を学ぶ。それは正に北学が長く主張して来たことに他ならなかった。

その役割を担うことは、北学の系譜を引く允植にとって、万感の思いがあったに違いない。

こうして、急遽、領選使として出発した彼は、途中、義州から上疏文を、漢城の高宗へ送っている。それを『朝鮮史』によって要約すれば次のようである。

領選使金允植、義州府より上疏す。曰く、方今、宇内気運大いに変じ、異城殊類各治兵駛船し、合従連横、兵力を以て相雄し、法律を以て相持し、天下に彌満し、水陸漸く逼る。此時に當り、閉戸して見ず、高枕して安臥せんと欲するも得べからず。予禦の策最も急と為す。事変は無窮にして、財用継ぎ難く、国家施為あらんと欲するも得べからず宜しく克く財用を節し、無益の費を減じ、不急の需を捐て専ら当急の務を治し、事業を興隆せしめば国家の幸いなり。(3)

ここで彼が主張しているのは、結局、「不急の需」を捨て、それによって浮いた費用を「當急の務」に回すことにより、現今の難局に立ち向かおうということである。ここに我々は、この当時迄、彼の思想が、大院君政権時代のそれと、大きく変化していないことを知ることができる。或いはそこには、黄海道暗行御使や順天府使等を歴任することにより、朝鮮社会の疲弊状況を実感したことがあったのかも知れない。(4)

しかし、このような彼の思想は、清にて世界の現実と触れ、李鴻章に代表される、清の洋務官僚達と接することにより、次第に変化して行くこととなる。それでは、清における彼はどのような思想的変化を遂げて行ったのであろうか。次に清滞在中の彼の言動について少し細かく見て行くこととしたい。

(1) 尤も、厳密に言えば、允植は文科合格の以前にも、叔父益鼎の力によってであろうか、蔭職により、官職を得ていたが、彼が恒常的な官界の一員となり、順調に官人としての道を歩み始めるのは、やはり、この科挙合格を待たねばならないであろう。

(2) 金允植「陰晴史」上、韓國史料叢書第六『従政年表・陰晴史』、國史編纂委員會【韓国】(一九六一)、三五頁。

(3) 朝鮮史編集会編『朝鮮史』第六編第四巻、朝鮮総督府(一九三八)、五九五頁。また、原文については、『全集』下、三一頁。

(4) 『續陰晴史』下、付録。

第三節　李鴻章への書簡

金允植が領選使として漢城を出発したのは、高宗一八年九月二六日のことであった。任命が一九日であるから、異例の急な出立であったと言えよう。

先に述べたように領選使とは、清に派遣する留学生達を無事その任地に赴かせる為の使節長であった。しかし、允植は、陰に高宗からもう一つの密命を受けていた。即ち、それは日本への開港以後、危急の問題と化していた、西洋列強に対する開港の問題を、清と論議し、その援助を受けることであった。(1)

つまり、朝鮮は開港からその軍事的近代化に到る迄、多くの点で清の助言を仰ごうとしていたのである。この意味からも、元来が開国論者である允植は、正に領選使に打ってつけの人物であった。そこには或いは、高宗自身の意志もあったのかも知れない。

他方、当時の清において、この面での最も大きな権限を有していたのが直隷総督であり北洋大臣でもあった李鴻章である。李鴻章は朝鮮との関係においても、早くから朝鮮側の議政の一人である李裕元への密函を通じて接触を有していた。(2)

李鴻章に代表される当時の清の洋務官僚達は、概ね朝鮮の開国を止むを得ざることであり、寧ろこの機会を上手く利用するべきである、と考えていた。彼等から見れば、当時の朝鮮は、正に「火積薪之勢」[3]であり、これを放置することは、清自身の安全にとっても脅威であった。中には、この状態を是正する為、進んで朝鮮との事大関係を実質化し、そこへの支配を強めて行こうとする勢力さえあった[4]。何如璋などその例であろう[5]。

しかし、李鴻章は彼等とは異なる思想を有していた。朝鮮への清の介入に対し、比較的消極的であったのである。彼はいう。朝鮮に事が起こった際、清は朝鮮に対して力の限り助力を行うであろう。しかし、朝鮮への道は「道里遼遼」であり、肝心な時に援助が行き届かないことが憂慮される。特に日本の脅威は深刻である。朝鮮が独力で以てこれに備えることは困難であろうが、日本が恐れる西洋列強との関係を結べば、日本も容易には手出しできぬであろう。また、ロシアの脅威も深刻である。その為にはある程度の、朝鮮自身の「自強」が必要である。

李鴻章は自らの指揮下にある北洋軍閥の実力の限界を熟知していたのであろうか[6]。結局、彼は、朝鮮は中国の力に全面的に頼るのではなく、西洋列強と日本との間で均衡を成立させることにより、独立を維持しつつ、更に有事に備えて自強を行うことが必要だと言うのである。この意味で李鴻章は、限られた範囲であったにせよ朝鮮が自立へ傾くことを欲していた[7]。元来、朝鮮がこの時期開港に大きく踏み切ったのにも、このような考えを有する李鴻章からの密函が大きく作用していた。その意味で、清に派遣された金允植が、学習の場として予定されていた天津にではなく、まず、李鴻章のいる保定へと歩を向けたことは、当然であるのかも知れない。

ようやく保定に到着した允植は、早速李鴻章に書簡を送り、これと会談を行っている。允植は、ここでの意見は興味深いものである。彼は朝鮮の置かれている内外の苦境について述べ、日本の脅威について李鴻章に同意した後、次のように述べている。

我が小邦朝鮮は長年の間の弱体化した状態に有り、俄にこれを立て直すことは困難である。縦令、通商を行い、錬兵に努力したとしても、その立て直しに相当の時間がかかるであろう。以上のことを考慮に入れて今の朝鮮の状態を考えるに、今の朝鮮の急務は、国を選んで有効関係を結び、それによって取り敢えずの苦境から逃れることである。西洋諸国中、長らく、アメリカは、国が豊かで兵が強く、しかも心が公正で、その心性が和を貴ぶと聞いて来た。国が豊かであれば、他を貪ることが少ないであろうし、兵が強ければ恃みがいがある。しかも、心が公正であれば物事の処理は平らかであろうし、心性や和を貴ぶのであれば、礼儀も尊重するであろう。(8)

この後、彼は、そのような政策を実現する為には、朝鮮の朝野は余りに、西洋列強を排斥することに急であり、朝鮮国王は非常に苦労している。願わくば、中堂（李鴻章）にその為の御力を御貸し願いたい、としての手紙を終えている。

結局、允植は、朝鮮の直面する当面の危機を、宗主国清を通じて、「正義の大国」アメリカとの盟約を結ぶことにより、解決しようというのである。ここには、それ迄の允植の主張に比べて、朝鮮の状況が悲観的に描かれている。それ迄允植は、朝鮮の独力での改革を考えていた筈なのに、一体どうしたことであろうか。

嘗て李裕元は、度重なる李鴻章の開港勧告に対し、朝鮮は文弱であり以夷制夷を行う余裕がなく、万国公法による「強弱相維」の実現も琉球の例を見れば実現困難であり、また、物産の乏しい朝鮮には通商を行っても益がなく、悪戯に財政を枯渇させ日本の二の舞になるだけである、として、開国を固く拒んだ。(9) それと比べた時、金允植の書簡に、朴珪寿の流れを受けた「正義の大国」の存在を当然視し、それへの信頼を基礎に開国を主張した、朴珪寿の

影響があることは明白である。或いは、そこには、その認識を朴珪寿と共有していた、高宗の意志が反映していたのかも知れない。このような「正義の大国」への信頼は、彼が李鴻章と直接の会談を行った際にも、再び述べられている。[10] そもそも允植が遣わされたのは、そのような観点から、当面の問題として西洋列強との開国を行い、同時に将来に備えて、軍備の近代化を行うが為であった。それは開国へ向けての朝鮮王朝の公的な意志であり、その意味では、その実現の役割を担う允植の書簡の内容が左のようになることは、当然のことであったのかも知れない。

「正義の大国」への信頼を基に開国を行い、冗費削減により稔出した費用で、軍備強化を遂行する。しかし、それだけなら、それは単に領選使に科せられた使命に過ぎなかった。彼はそれをそのまま伝達しているに過ぎず、我々はここにも彼独自の考えを見ることはできない。それなら、彼自身はそこからどのように考え、何を学んで行ったのであろうか。そして、彼の前に現れた現実とは何であったか。次に章を改めてその点について詳しく見て行くことにしよう。

(1) 「陰晴史」、八七頁。また、『朝鮮史』第六編第四巻、六〇三―五頁。

(2) 宋炳基『近代韓中関係史研究』學術叢書第八輯、檀國大學出版部【韓国】(一九八五)、一二頁以下。中央研究院近代史研究所編『清季中日韓関係史料』中國近代史史料彙編、中央研究院近代史研究所【台湾】(一九七二)、三六〇頁以下の史料を参照のこと。

(3) 『清季中日韓』、三六三頁。

(4) 例えば張謇は、「朝鮮前後事宜六策」で述べている。「於朝鮮則援漢元菟楽浪郡例、廃為郡県、援周置監国、或置重兵守其海口、而改革其内政、或令自改而刺練新軍、聯我東三省為一気」。秋月望「朝中間の三貿易章程の締結経緯」、『朝鮮学報』第一一五号、参照。

(5) 『清季中日韓』、四四〇頁。何如璋は、朝鮮に蒙古やチベットと同様の政令を敷き、内政・外交を中国が主事することを上策とす

る一方、現実的配慮から、朝鮮に万国をして勢力均衡の体制を成立させることを主張している。また宋炳基『近代韓中』第四章。

(6) 例えば、『清季中日韓』三六六―九頁。

(7) 従って、李鴻章が当初から朝清関係を「近代的支配・従属の関係に転化させようと図っていた」というのは適切ではない。金文子「三・一運動と金允植」、『寧楽史苑』第二九号（一九八四）。また、原田環「朝・中『両截体制』成立前史」、飯沼二郎・姜在彦編『近代朝鮮の社会と思想』、未来社（一九八一）。尤も、李鴻章においては、朝鮮の自強は、付随的なものであり、中心は勢力均衡策で安全を保障することであった。宋炳基『近代韓中』。

(8) 『全集』下、二九九頁、「陰晴史」、二四―六頁。

(9) 宋炳基『近代韓中』、三二頁以下。

(10) 「陰晴史」、三〇頁。

第三章　親清官僚の誕生

第一節　洋務官僚との接触

開国へ向けた李鴻章との一連の会談を終えた金允植は、学徒等を率い、天津へと向かった。一二月六日に、彼は天津に到着する。その翌々日、彼は早速、当時この軍機所の観察を勤めていた許其光・潘駿徳と会談している。言わば、允植はここで本当の意味で、西洋化に現場で働く洋務官僚との接触の場を初めて得たこととなったのである。しかし、その言葉は、允植、そして朝鮮王朝にとって衝撃的なものであった。潘駿徳はいう。

ここにある機器は皆、西洋人が図示したものである。中国人は日々その研究を積んでいるが、それでも未だ其の意に通じることができない。西洋の槍や大砲は、中国人もまた製造することができる。しかし、その為に費やされる費用は莫大であり、西洋からこれらを購入した方が安上がりであり、故に利益のないことである。貴国の学徒の中にも機器に通じたものは居るかも知れないが、これらを学習することは不可能であろう。また、縦令この学習に成功したとしても、結局は、帰国してからもそれを現実に役立てることはできないであろう。何故なら、これらの為の機器設置には膨大な費用を費やさねばならぬからだ。貴国の財力は、果たしてそれだけの負担に耐えられるのだろうか。(1)

これは、領選使としての允植の役割を否定するに等しいものであった。大国清が財政的に支えられぬものを、小国朝鮮が支えることができぬことは自明であろう。しかし、だからといって、無為の侭に済ませられる問題ではない。允植は次のように答えている。

それならば、学徒がこれを学ぶことは全く不可能なのであろうか。もし、我が国にとって有益であり、しかも、費用がかからず、多くの労力を必要としない手段があれば、それだけでも是非学習したい。

潘駿徳は、この問いに答えて、唯小銃と薬莢、そして火薬と語学を学ぶことがそうであろう、と答えている。それは、西洋や日本と五分に渡り合うことを考えていた允植にとって、衝撃であったに違いない。確かに、西洋の小銃や薬莢は、朝鮮のものより優れていたが、それのみで彼等に敵対することが不可能であることは、余りにも明ら

かであった。

当時の朝鮮が洋式兵器を習得することが技術的にどの程度困難であったかを議論することは、本稿の目的から外れることである。筆者が取り上げたいのは、もう一つの財政の問題である。軍事的近代化の為の財政的資源。それは、嘗て允植が楽観視していた問題であった。しかし、今や、「夷狄の長技を学ぶ」ことが、允植が当初考えていたよりも遙かに切迫し、且つ多くの費用を必要とすることが明らかにされたのである。問題は、嘗て彼が考えるようなものではなかったのである。実際、この問題は、允植にとって、国家規模の問題であると同時に、身近な問題でもあった。留学生等を支える財政的余裕が既に尽きかけていたのである。[2] 朝鮮から持って来た費用は底を尽き、朝鮮本国からの追加援助は、未だ到着していなかった。元来、恒常的な財政難に苦しんで来た朝鮮政府にとっては、領選使を清に送り込むことさえ、困難なことであったのである。彼等は今や、李鴻章や軍機所の好意により、辛うじて日々の費用を与えられる状態であった。[3] 領選使金允植は、この問題に頭を痛める日が続くこととなる。

その後、再びアメリカとの開港準備の為、保定を訪れた彼は、李鴻章との会談を数度行っている。保定においても、開港に関する話を終えた彼等の話題と言えば、朝鮮がいかにして富を得るかであった。茶・羊・養蚕。李鴻章はこのような允植に対して、様々な富国への手だてを提案している。[4]

允植は以後も、洋務官僚達と接触する度、熱心に朝鮮の富強の法を訊ねて回った。允植はいう。「財政を確保することと、軍事力を整備することが今日の急務である。しかし、軍事力の整備もまた、財政が確保されて後初めて可能なものなのだ。[5]」。

嘗ての彼の考えが訂正されねばならないことは明らかであった。現実は非情であった。滞在の費用は乏しく、学徒達の学習も遅々として進まない。[6] 当初は大規模機器の学習を目指していた彼等であるが、この費用の稔出の問題

を考え、允植は、洋務官僚の薦めの通り、彼等の多くをより小規模で、人力のみによって可能な小機器習得へと転進させることとなることになる。[7] 今や允植が領選使として、高宗から託された使命を完全に果たすことは困難な状況であった。不安な日々を過ごす允植にとって、金銭的、そして思想的に様々な援助を与えてくれる李鴻章とその幕僚達、そして彼等が軍事と外交の権限を握る清への信頼と依存の念は、日増しに高まって行ったに違いない。保定での李鴻章との二回目の会談を終えた後、允植は、高宗に向けて、自らの想いを次のように綴っている。

我が国が中国の属邦であることは、天下周知のことである。我々は常に中国が現実には宗主国としての役割を果たしてくれないのではないか、そしてもし弱国である我が国が世界の中で孤立するようなことがあれば、つまり、大国による保護を受けることができなければ、独立を保つことは難しいのではないか、と危惧して来た。しかし、今の中国で兵を掌る大臣である李鴻章は、幸いにして我が国を保護することが自らの役割であることを、毅然と自任し、既に自らその旨を各国に明らかにしてくれている。[8]

また、彼は後には「今の世においては唯強弱というものがあるだけであって、公法というものは存在しない。それでも我が小国朝鮮は、唯々公法を守って行くことにより、他国の信を失わないようにすべきである」、とも述べている。[9] これは他からの意見の伝達ではない、まぎれもない彼自身の言葉である。ここでは朝鮮独力の改革は後退し、代わって、自強と安全保障における、他国への一方的期待が大きくなっている。最早、朝鮮の独立は、独力のみで維持可能だとは考えられなくなっているのである。しかし、唯「謹守公法」するだけでは、国防が不可能なことも明らかであろう。それには朝鮮が与えた「信」を理解し、これを助けてくれる大国が必要である。それでは、朝鮮

が保護を求めるべき国は、どこであるか。允植はそれが即ち、清だというのである。彼も嘗ては、清に対して自らを託すことには、不安の念を禁じれなかったが、今や清は正に頼むべき国であることが明らかになった、というのである。[10] 言い替えるなら、この時期の清滞在は、結果として、朝鮮の「小ささ」と、その対象的な存在としての清の「大きさ」と「公正さ」を大きく実感させることとなったのである。次第に大きくなる清の姿。それでは、そのような允植の思想は、どのような政治的行動へと彼を導いて行ったのであろうか。

(1)「陰晴史」、三九頁。
(2)「陰晴史」、四〇頁。
(3)「陰晴史」、四九頁。
(4)「陰晴史」、五五頁。
(5)「陰晴史」、一七六頁。
(6)「陰晴史」、八三頁。
(7)「陰晴史」、七五、一六九頁。
(8)「陰晴史」、五七頁。
(9)「陰晴史」、七九頁。
(10) ここで彼が清が頼むべき国である最大の理由として、李鴻章が頼むべき人物であることを挙げていることは興味深い。元来、朝鮮は、満州人よりも漢人を重く見る傾向が有り、彼等漢人官僚にはそれだけで大きな期待が向けられていた。

第二節　対米開国

高宗一九年も二月の頃になると、允植は嘗ての自信を失いつつあった。他方、これに対する李鴻章も、進まない朝鮮との交渉に次第に苛立ちを深めて行ったようである。

しかし、朝鮮がアメリカとの接触を持たねばならない日は、近くに迄来ていた。兼ねてより予定されていた、アメリカ艦隊訪朝がすぐそこに迫っていたのである。[1] 既にアメリカからの書簡は到着していた。[2] だが、この時点でも、朝鮮本国では西洋への開国などもっての他、という意見が大半であり、台閣は最終的な決断を下しかねていた。[3]

李鴻章の怒りは、二月に入り来清した朝鮮の燕行使が、これに対する答えどころか、朝鮮の対米開国交渉の存在さえ知らされていなかったことを知り、爆発することとなる。遂に、二月一七日、李鴻章は次のような言葉を以て、允植を恫喝することとなる。「此次中國、亦不必派員、由他自去」。[4] 即ち、この度は清は、朝鮮に開国を助ける使者を派遣しないかも知れない。従って、他を頼ったがよかろう、というのである。

勿論、それ迄西洋との交渉経験のない朝鮮王朝が、直接これと開国の交渉を持つことは困難である。清以外にそのような助力を受けるべく、頼ることのできる国もなかったであろう。そもそも允植は、このような判断の下、清の助力を得るべく派遣されたものであった。しかも、今や日々の留学生の学資にも事欠く状況である。唯でさえ清を頼む気持ちの大きくなっていた允植にとって、李鴻章の怒りを招き、彼から見捨てられることは、即ち、朝鮮が世界から孤立することを意味していたであろう。孤立は即ち、独立の喪失を意味している。朝鮮はそのような小国なのである。

それは、允植にとって、朴珪寿から授かった教えであり、また、自らが清において学びとった貴重な教訓であった。更に、幼年期以来自らが「孤」であることの苦しみを味わい続けて来た彼にとって、「孤」であることは、本能的に避けるべきことであると考えられたのかも知れない。允植は高圧的な李鴻章の言葉を前にして、只管平身低頭

し、李鴻章の怒りを解くべく努める他はなかった。允植の屈伏を認めた李鴻章は、即座に使節とそれを運ぶ北洋艦隊の派遣を決定している。以後、朝鮮の対米開国の為の交渉は、清によって主導され、朝鮮が忖度できる余地は大きく制限されることとなる。

一見、それは金允植が考えていた開国と大差ないように思えるかも知れない。確かに、清の助力により対米開国交渉を行うこと自身は、当初の目的通りである。しかし、重要なのは、当初、朝鮮は、自らの意志により、清の助力を得、対米交渉を行わんとしていたのに対し、実際の交渉は、清主導のものとなってしまっていることである。主客の立場は完全に逆転し、ここに従来、形式的なものに過ぎなかった朝鮮と清の事大関係は、まず外交面において、実質化の一歩を踏み出すことになるのである。

確かにそこには清、就中、李鴻章の意志もあったであろう。しかし、ここで見落とされてはならないのは、交渉の依頼を持ち掛けたのは、朝鮮の方であったということである。確かに朝鮮王朝の外交的能力は、技術・経験の両面で、他に大きく劣っていたであろう。しかし、それは本当に、最初から全く不可能である、というものであったろうか。

重要なことは、朝鮮王朝が自己の無力を前提とし、清の善意に縋ろうとしたことであった。李鴻章は決して、清の内部において、朝鮮との事大関係を実質化することに特に積極的な人物ではなかった。彼は寧ろ、朝鮮が自己の手で開国し、自力で、清の手を煩わせず、自強を進めることを望んでいたのである。列強の圧迫に苦しむ李鴻章は、厄介な問題をもう一つ抱え込むことを恐れていたのかも知れない。少なくとも、もし、彼が当初から事大関係実質化の方向で考えていたのであれば、允植が来清した時点で、直接的介入に動き出すこともできた筈である。その意味で、朝鮮は最も適切な人物を選んでこれを頼んだと言える。しかし、金允植と朝鮮王朝の煮えきらない態度は、

結局、その李鴻章をも苛立たせ、彼に直接的な行動をすることを余儀なくさせたのである。

ここでその後の朝米交渉について詳しく述べることは意味がなかろう。問題は、この結果、朝鮮の政治外交において、外国、就中、清への依存度が高まったことである。財源不足と、国内の意見集約能力の欠如。それらはいずれも、朝鮮王朝の国家としての能力が、低かったことを意味している。だからこそ、外からの助力が必要であったのである。

尤も、この時点では允植は、朝鮮の軍事的改革を完全に断念していた訳ではなかった。つまり、そこでは短期的に朝鮮が独力で列強の脅威に直接抵抗することはともかくとしても、手始めに安価なものから出発し、力を付けて行くことにより、長期的にはこれと互角に渡り合うことのできる国家の建設が依然目論まれていたのである。

しかし、それとて朝鮮が独力で行うことは困難であった。允植はここに、「正義の大国」清からの援助を重ねて希望することとなる。そしてその後、彼はそのような清の力を背後にする形で、親清開化官僚の代表的人物として活躍することとなるのである。

それはある意味では、彼の人生において最も華やかな時期であったと言える。それではその時代、彼はどのように考え、どのように行動して行ったのであろうか。次に領選使行以後の允植について見に行くこととしよう。

(1) 「陰晴史」、八八―九頁。
(2) 「陰晴史」、五四頁。
(3) 「陰晴史」、八八頁。
(4) 「陰晴史」、八九頁。

第三節　壬午軍乱と允植の帰国

允植がその領選使としてのディレンマに苦しんでいた頃、朝鮮国内では、大事件が勃発しようとしていた。即ち、壬午軍乱がそれである。高宗一一年の政権獲得以来、一貫して大院君系勢力を排斥し、対抗姿勢を剝き出しにして来た癸酉政権であったが、それは結果として、政権から排斥される者を大院君派として結束させ、彼等を過激化させて行くこととなった。それはやがて、開国へ進む王朝政府に対して鎖国継続を主張する地方儒生達の動きと連携し、大きな動きへとなることとなった。高宗一八年に入ると、地方では台閣を非難する上疏運動が活発化し、漢城では高宗廃位の計画があったとして、大院君の庶子、李載先と大院君の側近安騏泳が処罰されている。

このような大院君派の動きを正当化した形となったのが、江華島条約による、日本への開国であった。実際、安騏泳等の計画においても、日本公使館は、王宮や威族・相臣等と並ぶ、三つの襲撃対象の一つであった。当時の知識人の多くは、急速に西洋化する日本を、東洋の秩序から離れ西洋と「打成一片」[1]したものであると看做し、これへの開国を、西洋への開国と同一視する者が多かった。彼等にとり、西洋の夷狄に国を開くことは、邪教キリスト教へ国を開くことであり、許されることではなかったのである。

更に、一八八一年、金允植の清派遣の少し前、高宗は日本から軍人を招き、小規模ながら朝鮮初の近代式軍隊編成に着手していた。所謂、別技軍がそれである。このような日本人による日本式の軍隊教育は、衛正斥邪派にとっては、夷狄のそれに他ならなかった。彼等はこれに反発を強め、やがて、その動きは、台閣へも飛び火する[2]。

事件の勃発は時間の問題であった。最終的にこの引き金となったのは、新旧両軍隊における軍糧配布不均衡の問題であった。当時、朝鮮王朝の徴税システムの紊乱は頂点に達し、武衛営・壮禦営の二軍営の軍卒は、実に一三ケ月もの間放科を受け取ることができずにいた[3]。癸酉政権下、軍は長らく冷遇され、前年一二月には武職に対する官

位の引き下げさえ行われていた。[4]

そのような中、高宗一九年六月五日、軍卒達は、一三ケ月ぶりに配布された軍糧が規定の半分にも満たないことに激怒し、庫直が不正を働いたとして、彼等を欧打・殺害してしまうこととなる。九日、この暴動の首謀者が捕えられるに至り、軍卒達の怒りはいよいよ爆発する。事件は遂に大規模な旧式軍営軍卒の反乱へと展開されることとなる。

軍卒は、日本公使館を焼き、逃げ遅れた日本人や、癸酉政権の主要人物人、李最応・閔謙鎬等を殺害し、癸酉政権最大の実力者であると目されていた、閔妃の殺害へと向かうこととなる。閔妃はどうにか逃げおおすことには成功したが、漢城を出て身を潜め、ただ静かに反乱が去るのを待つのが精一杯であった。

軍卒の暴走は、必ずしも大院君や大院君派の武臣達に、扇動されたものではなかったようである。しかし、癸酉政権の主要人物が駆逐された中、宮中は大院君派の支配するところとなることとなる。早速、大院君が大小公務を禀決することが決定され、政治の中心に復帰した大院君は、手始めに、軍事組織を嘗てのものに戻し、軍営に自己の影響の強い、李景夏・申正熙の両名を配置し、その掌握を図っている。

朝鮮の動きは、早くも六月一八日には、日本駐在清国大使からの電報という形で、天津の金允植の下に伝わっている。これは允植にとっても大きな衝撃であった。この時、彼が何よりも恐れたのが、朝鮮国内の混乱を口実とし、日本が朝鮮に軍を派遣することであった。暴徒が日本人を殺害したことが事実である以上、これをその侭にしておくことは極めて危険である。

このような認識に立った允植は、早くも翌日には、海関署の長、周玉山に、清が朝鮮に出兵し、日本と朝鮮の交渉を援助してくれることを要請している。允植はいう。「我が国王は即位以来、国を憂い民の為に働き、徳を失した

ということを未だ聞かない。唯、国勢が微弱であり、国が孤立すれば社稷を守ることさえ困難であるが故に、中国の命を勘案して、各国と条約を結んだに過ぎない」[5]。高宗に罪はない。乱党は高宗を逆恨みし、目先の考えだけで行動した結果、朝鮮を危機に直面させようとしている。これを回避する為には方法は一つしかない。「それは[中国が]速やかに兵をだすことであり、ここにおいて決して日本に遅れてはならない。中国が兵を出しさえすれば、交戦には到らぬであろうし、自ずから善処の道があろう。このようなことは他国には不可能なことである」[6]。

尤も、清は允植の要請とは無関係に、既に出兵を決定していたようである[7]。しかし、同時にこの允植の行動が、清の行動を正当化する役割を持っていたことも事実であろう。六月二八日、允植は、当時主事として清に滞在していた魚允中と共に、清軍先導の役割を担う嚮導官に任命され、七月二日には、清船にて朝鮮へと急行することとなる。

その後の清の措置は迅速であった。七月七日朝鮮に到着した清軍は、日本と朝鮮の間の調停を清に依頼した大院君の動きにも構わず、一〇日には、彼を拉去し、保定へと連行するに至る。主導者を失った反乱軍は数日の内に壊滅し、主導権は清と金允植の側に移ることとなる。翌月には、閔妃が漢城に呼び戻され、朝鮮の政局は平穏を見る。

允植が、清へ渡ったのは、軍事的技術を習得し、以て朝鮮の自立を成し遂げることが目的であった。しかし、正にここでの允植の役割は、清軍の朝鮮進出を正当化し、支援するものとなってしまっている。逆に自立は損なわれたのである。実際、軍乱当時允植は、清の軍事的作戦の為に情報を収拾するなど、積極的に手を貸している。ここで重要なのは、壬午軍乱は紛れもなく、内政の問題であった、ということであろう。確かに清の介入により、大院君派は排除できたし、日本の介入も防ぐことができた。しかし、朝鮮はこれにより、外国軍進駐と外国勢力による国勢への介入の最初の例を作ってしまうのである。以後、列強は清の例に従い、朝鮮に進出して行くこととなる。

そして、朝鮮は列強の軍隊が衝突するパワーゲームの場として、その主体性を急速に喪失して行くことになるのである。

このような中、允植は、ともかくも朝鮮に帰国した。それでは、このようにして朝鮮に戻った允植は、以後、どのような活躍を見せることとなったのであろうか。次に、この点について、見てみることにしよう。

(1) 朴珪寿の表現である。韓國學文献研究所編『朴珪壽全集』上、韓國近代思想叢書、亞細亞文化社【韓国】(一九七八)、七五四頁。

(2) 國史編纂委員會編『承政院日記』、同委員會【韓国】、高宗一九年三月二九日条。以下、本文及び註に、日時だけを記した場合は、この『承政院日記』の記事を示す。

(3) 『朝鮮史』第六編第四巻、高宗一九年六月五日条。

(4) 高宗一九年一二月二五日。

(5) 「陰晴史」、一八一頁。

(6) 「陰晴史」、一八二頁。

(7) 允植やこの時彼と共に行動した魚允中は、清国軍出兵準備の動きを知らされていなかった。「陰晴史」、一八四頁。